

第17部会

教社会学は「本格性の度合」Ⅱ「垂直的な次元」を知らないと批判される。ウィルバーは「それぞれ十分に合法的」な九つの宗教の定義を整理している。そのうち八つ目は「合法的」宗教で「マナ」を寓意し「タブー」を回避する、水平的なトランスレーションを有効にする。九つ目は「本格的」宗教で、「もつとも中心的な意味で宗教的であると目されるある特定の次元・レベル」へ向かう、垂直的なトランスフォーメーションを有効にする。「合法性の危機」とは、マナおよび不死の記号が統合的防衛的な昨日を果たしそこなう、つまり翻訳Ⅱ変換の失敗の結果であり、「本格性の危機」とは、「もつと高次レベルの世界観からの挑戦に直面」したときに、変形Ⅱ変換の第一歩として起こる。そして、すべての宗教（または世界観）は、合法性と本格性の度合という二つの異なった独立変数を尺度として、「妥当性の度合」を判定できるという。

禅仏教の瞑想実践をベースにしたウィルバー自身の宗教研究が、極度に個人的・内面的な関心と垂直的な志向を持っていることは歴然としている。ただし、統合的ビジョンを主張するからには、そこに自閉することはもはやあり得ず、宗教研究においては、二つの方向を自ら推進しようとしている。一つはトランスパーソナル心理学の応用であるトランスパーソナル社会学（Ⅱ超越的社会学）というかなりエクステンシヴな課題であり、もう一つは瞑想実践の自然科学的実験による裏付けというきわめてインテンシヴな課題である。

「トランスパーソナル社会学」「超越的社会学」は、「階層秩序」を考慮した「批判的規範的な宗教社会学」であり、その際

の有力な道具の一つが、「本格性」と「合法性」という対概念である。宗教社会学で現在流行している言葉で言えば、この「合法性」とは「公共性」のことであり、宗教社会学ではむしろ主流であり続けているテーマと言つてよい。他方、ウィルバーの言う「本格性」とは宗教の発達段階のことであり、このような規範的価値を強調する宗教研究者は周辺的である。

ウィルバーを読み進むなかで、私が随所で疑問を覚える点では、「死者」「死後世界」がほとんど主題化されていないことである。じつさい、永遠の哲学の「非二元的な伝統」にとつては、生者と死者の区別は問題とならない。生と死の関係を主題化すると、そうしたトランスパーソナルな「スピリット」の壮大な説明と比べて、自己収縮的なパーソナルな段階の「ソウル」を強調せざるを得なくなることがわかる。

現象学的社会学における超越概念

諸岡了介

一九六七年に『見えない宗教』（英語版）を発表したトーマス・ルックマンは、その後、アルフレッド・シュッツによる超越の現象学に触発されながら、宗教の私事化論を深めるかたちで「超越の縮減」論を展開している。

ルックマンが編集を行った遺稿『生活世界の構造』で、シュッツは「大規模な超越」「中規模な超越」「小規模な超越」とい

う超越の三類型を設定している。「大規模な超越」とは、日常生活世界から見たその他の現実世界（意味領域）の「超越」を指すもので、多元的現実論を基礎に設けられた概念である。

「中規模な超越」は、自己の経験に対する他者の存在や経験について、「小規模な超越」は、「経験の核」に対するその地平のように、ひとつの経験の内的構造について言われる概念である。「自然的態度の構成的現象学」を標榜し、超越論的な次元の問題をそれ自体としては追究しなかったシュッツであるが、ここでは「大規模な超越」から「中規模な超越」、さらには「小規模な超越」へと向かうにつれ、経験の超越論的分析に近づき、足を踏み入れていく格好となっている。

ルックマンは、このシュッツの議論を援用し、近現代社会における宗教において、それが扱う主題が「大規模な超越」から「中規模な超越」、さらには「小規模な超越」へと転換してきていると論じている。もともと、宗教の私事化論に寄せたルックマンによる援用には、もとのシュッツの議論との違いが小さい。特に、シュッツが人間経験の一般的条件について論じた「小規模な超越」を、ルックマンは「近現代的独我論」としての個人主義的諸表象の問題として捉えている。

しかし、そうした違いはあるにしても、両者の理論を比較検討する中で、現象学的な視点と、宗教の私事化現象との間に一種の平行関係があることが気づかれる。ルックマンによる宗教の私事化論は、シュッツの現象学的な視点を持ち込むことによって、近現代における宗教状況の一面を明らかにしたものであるが、同時にまたそれだけではなく、現象学に代表される、

自己の経験の一般的構造を主題とする知の様式が求められ、姿を現してきた歴史的・社会的条件を、宗教史との関連から論じるものとして解釈しなおすことができるように思われる。

こうした解釈は、翻って、いわゆるスピリチュアリティに関する諸現象を含め、私事化した「見えない宗教」の現れが、単なる社会諸制度の分化の問題や、歴史的に特殊な個人主義的表象の問題に尽きるものではないこと、人間経験の一般的構造に対するアプローチの展開を含んでいることを理論的に示唆するものである。

宗教とグローバル化

——ウルリッヒ・ベックの世俗化論——

上村 岳 生

近代化につれて宗教は消滅していく、というようにいわばゼロサム・ゲームとしての「世俗化」の前提は説得力を失いつつある。現代ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックもまた、このような従来の「世俗化」テーゼの批判者である。

ベックは世俗化を、宗教が個人化すると同時に国家や地域といった文脈から解放されていく過程であると論じている。その過程において、宗教（制度）と宗教性（信仰）は乖離していき、「自分の神（der eigene Gott）」と彼が呼ぶものへと宗教は変容する。それは決して宗教の衰退でも自閉でもなく、グロ